

## Absalom, Absalom!におけるFaulknerの語りの技法 (VII)

重 迫 和 美

In order to clarify the distinctive narrative technique in *Absalom, Absalom!*, I have in previous papers examined Chapters I, II, III, IV, V and VI. These examinations have made it clear that the novel controls not only the readers' information, but also the narrative structural and psychological distances between the readers and Quentin.

From Chapter I to V, the readers gradually come to appreciate Sutpen's story from Quentin's point of view because the narrative structural and psychological distances between the two become progressively shorter. In Chapter VI, however, the narrative structural distance becomes at times longer.

In this paper, I focus on Chapter VII, the narrative structure of which is different from the other chapters previously discussed. Then I consider how the readers come to relativize Quentin, concentrating on the role of Shreve as an observer of Quentin.

### 序

*Absalom, Absalom!* (以下*Absalom!*) が読者に与える特異な読書体験<sup>1</sup>は、一見矛盾する3つの要素(①読者はQuentinと自分を同一視しながら、Sutpen家の謎解きに加わる。②次第に読者はQuentinと同じ見方を取らなくなる。③読者はQuentinを*Absalom!*に登場するcharacter達の一人として相対化し、作品全体を鑑賞する立場に立つ。以下①, ②, ③。)が複合的に作用した結果生み出されている。この特殊な効果を生み出す仕組みを明らかにするため、私はこれまでに第1章から第6章までを検討し、それがこの作品の語りの技法(読者に与える情報の調節, 読者とQuentinとの物語構造上の距離と心理的距離の調節)によることを明らかにしてきた。本稿では、これまでの研究成果を踏まえ、第7章での読者とQuentinの関係を検討した上で、その関係を成立させている語りの技法を明らかにする。

### 1. 読者とQuentinとの距離

第7章の物語状況を確認するため冒頭部分を以下に引用する。

There was no snow on Shreve's arm now, no sleeve on his arm at all now. . . . So it is zero outside, Quentin thought; soon he will raise the window and do deep-breathing in it, clench-fisted and naked to the waist, in the warm and rosy orifice above the iron quad. (176)<sup>2</sup>

本章はEx narratorの語りから始まる。“There was no snow on Shreve's arm now, no sleeve on his arm at all now”の部分は、第6章冒頭の“*There was snow on Shreve's overcoat sleeve, his ungloved blond square hand red and raw with cold, vanishing.*” (141)と連続しているから、本章の語りの現在は第6

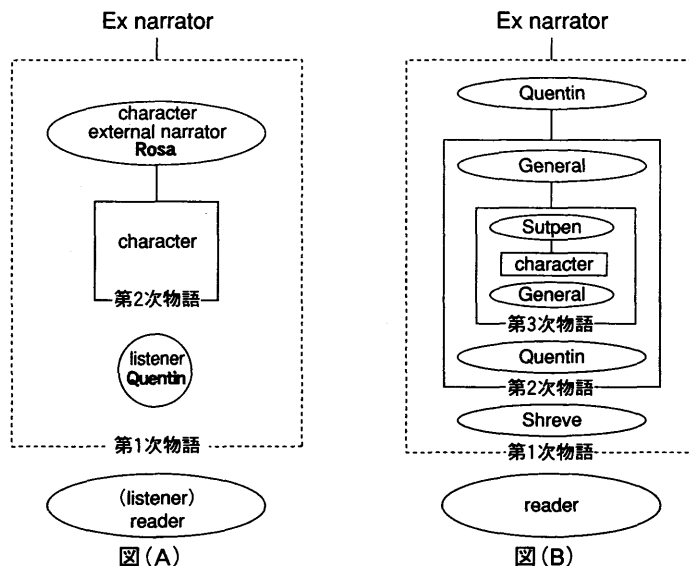
章の語りの現在(1910年)の続きであることが判る。場所はHarvard大学のQuentinとShreveの部屋。Quentinが、Sutpenから話を聞いたQuentinの祖父General Compsonと、Generalや町の人々から話を聞いた父Mr. Compsonから話を聞き、それをShreveに語るという物語状況である。QuentinがShreveに話をしているのが第1次物語世界、GeneralやMr. CompsonがQuentinに話をしているのが第2次物語世界、SutpenがGeneralに話をしているのが第3次物語世界となる。

前章までの検討によって、Quentinと読者との心理的距離が小さくなるのは、(1)QuentinはEx narratorがperspectiveをとって語る唯一のcharacterであり、(2)イタリック体で内面が描かれる唯一のcharacterでもあるためであることが明らかになった。(1)に関して言えば、既に引用した冒頭部分でも、“So it is zero outside, Quentin thought; soon he. . .”の部分は、Ex narratorがQuentinのperspectiveから語っているし、一方で、他のcharacterの視点からEx narratorが語ることはないので、本章についても当てはまることになる。

(2)のイタリック体については、その用法は本章ではいずれも前章で検討済みの4種類(Quentinの内的意識の声を写すもの、Quentinが他のcharacterの台詞を想像するもの、他のcharacterの声が、Quentinの知覚のフィルターを通して伝えられるもの、単なる声の強調)<sup>3</sup>であり、characterの声の強調を除いては、全てQuentinの内的意識を写したものと考えられ、(2)の仕組みが当てはまると言える。従って、心理的にはQuentinが読者と最も近い距離にあると言えるのだ。

では物語構造上の距離はどうだろうか。第7章の大きな特徴は、これまでどちらかと言えば物語のlistener(聞き手)であったQuentinが、narrator(語り手)になることである。物語構造図(A)、(B)を参照して欲しい。(A)は、第1次物語世界characterのQuentinが、第1次物語世界characterのRosaに話を聞く状況を示したもの。(B)は、第3次物語世界characterのSutpenが第3次物語世界characterのGeneralに話をし、第2次物語世界characterのGeneralが第2次物語世界characterのQuentinに話をし、第1次物語世界のcharacterのQuentinが第1次物語世界のcharacterのShreveに話をしている状況を示している。

前章までの検討によって明らかになったように、第5章までは、同じlistenerとしての役割を共有するため、Quentinと読者との物語構造上の距離は小さくなる傾向が強いが、第6章では大きくなっ



図(A)

図(B)

たり小さくなったりを繰り返していた。第7章では、Quentinはnarrator、読者はlistenerとして対極に位置する事になり、その距離は終始一貫して大きくなっている。これらのことから第7章では、読者とQuentinとの心理的距離は他のcharacterに比べて相変わらず小さいが、物語構造上の距離はこれまでのどの章におけるより大きいと言える。

## 2. 読者に与えられる情報

第7章では、Sutpen家の謎についての情報は、どの程度、どのように、読者に与えられるのだろうか。この章でのnarratorはEx narratorとQuentin, Shreveで、読者は特に、Ex narratorとQuentinから情報を得ることになる。Ex narratorの語る範囲は、Quentinと比べると、本章では圧倒的に少ないので、そこから得られる情報も少ない。しかしながら、Ex narratorが語る内容は、読者にとって唯一現実には起こったと見なして良いので、重要である。

Ex narratorは、Sutpenが戦争中に一時帰宅し、JudithやRosaと会った時のことを次のように語る。

[Judith] met him [Sutpen] on his return, . . . — the kiss again after almost two years, on the brow; the voices, the speeches, quiet, contained, almost impersonal: “And —?” “Yes. Henry killed him.” (222-23)

この引用によれば、Judith自らが、HenryがBonを殺したことをSutpenに伝えたことになっている。情報自体は目新しいものではないが、Ex narratorが直接話法でJudithの声を伝えているが故に、HenryによるBon殺害は、実際に起こったことであるという確証が読者には得られるのである<sup>4</sup>。

Quentinから得られる情報はEx narratorからのものよりかなり多い。本章では、実は読者はEx narratorではなくQuentinのvoiceを介してほとんどの情報を得るとすら言える。本章自体、QuentinがSutpenの話聞いたGeneralから昔聞いたSutpen談を、Shreveに語るという設定になっているからだ。多くの場合Quentinはそれらの情報を自分自身の言葉や考えではなくて他のcharacterの言葉や考えとして伝えている。

一つには、Quentinは第3次物語世界characterのSutpenの言葉によって情報を伝える。Sutpen屋敷が完成に近づいたとき、突然フランス人建築家が逃亡する。この建築家を連れ戻すためにSutpenは追跡を開始し、彼の友人であったGeneralも、その追跡に協力する。その日の夕刻に、Sutpenは14歳の時に父の使いでPettiborne屋敷に行き、その正面玄関で黒人に裏口に回るようにと指図される屈辱を味わった経験を、Generalに語る。彼は、父からの言づてを伝えることもなく森に向かい、そこで一人どうすれば自分が受けた屈辱に報いることができるのか思案に暮れたのだった。

‘But this aint a question of rifles. So to combat them you have got to have what they have that made them do what he did. You got to have land and niggers and a fine house to combat them with. You see?’ and he said Yes again. He left that night. He waked before day and departed just like he went to bed by rising from the pallet and tiptoeing out of the house. He never saw any of his family again.

“He went to the West Indies.” Quentin had not moved. . . . “That was how he said it. . . .” (192-93)

この引用で与えられるのは、Sutpenの計画 (design) に関する情報である。Sutpenの計画の内容自体は示されていないものの、彼に計画を抱かせるきっかけ (Pettiborne屋敷での屈辱) が明示されている

ことから、Sutpenの計画はこの時に受けた屈辱に報いる性質のものであることが判る。さらに、計画実現のために彼が必要だと考えた道具(“land and niggers and a fine house”)を手にすることをとりあえずの目標にしたことも示されていて、この目標達成のために彼は“the West Indies”に乗り込んだことが判るのである。

次にSutpenによって与えられるのは、彼の最初の妻についての情報である。彼はWest Indiesのフランス人の砂糖農園で奴隷の暴動を鎮圧した話を語る際、彼の最初の妻がこの農園主の娘であったことを明かす(199)。第6章までに、教養のないSutpenがフランス語を使う様が事実として描かれてきたが、この情報によって、何故Sutpenがフランス語を使うことができるのかという疑問が解消する。同時にSutpenがフランス語を解するという事実が、彼のWest Indies農園での体験談が創り話ではないという証拠にもなっている。そして、Bonもフランス語を話すことができることから、BonがSutpenと最初の妻との間にできた息子であることを暗示することになるのだ<sup>5</sup>。

さらに、最初の妻について彼は “I found that she was not and could never be, through no fault of her own, adjunctive or incremental to the design which I had in mind, so I provided for her and put her aside.”(194)<sup>6</sup>と、妻は自分の計画にとって役に立たず、それが離婚の理由であると説明する。妻にどのような非があったのかについて彼はフランス人建築家の追跡事件から30年後にGeneralの事務所に現れて、もう少し詳しく説明をしている。彼は新たな問題に直面し決断を迫られていたので、Generalに話を聞いてもらいたかったのだ。彼は第1の失敗から、現在直面している問題に至るまでを次のように整理する。

“I was faced with condoning a fact which had been foisted upon me without my knowledge during the process of building toward my design, which meant the absolute and irrevocable negation of the design; or in holding to my original plan for the design in pursuit of which I had incurred this negation. . . . Yet I am now faced with a second necessity to choose, the curious factor of which is . . . that either choice which I might make, either course which I might choose, leads to the same result: either I destroy my design with my own hand, which will happen if I am forced to play my last trump card, or do nothing, . . . this second choice devolving out of that first one which in its turn was forced on me as the result of an agreement, an arrangement which I had entered in good faith, concealing nothing, while the other party or parties to it concealed from me the one very factor which would destroy the entire plan and design which I had been working toward, concealed it so well that it was not until after the child was born that I discovered that this factor existed” (219-20)

彼によると、1度目の計画挫折の際にとった決断(離婚)が2度目の計画破綻の原因となり、最後の切り札(“last trump card”)を使う決断をしても結局は計画は挫折してしまうことになる。その2度目の計画挫折の原因についてははっきり述べられていないが、第1の失敗と第2の失敗は何らかの因果関係があることは示唆されている。最後の切り札についてもその内容自体は明かされないが、それが第2の計画を自分の手で握りつぶす結果をもたらすことは暗示されている。さらに彼は、そもそもの誤算のもととなった1度目の計画挫折の要因は、農場主側が巧妙に隠していたために子供が産まれるまで判らなかつたと説明している。その秘密とは何かは示されていない。しかし、それが息子(Bon)<sup>7</sup>の誕生によって暴露される性質のものであったと述べられている。こうして、1度目の挫折にも、2度目の挫折にもBonが関わってくることから、BonがSutpen家の謎の鍵を握っていることが読者にはほのめかされるのである<sup>8</sup>。

以上の情報は全て、Sutpenの台詞を写した直接話法で伝えられ、読者はSutpen物語の当事者であるSutpen自身から直接情報を得ている様な状況に置かれる。この種の情報の信頼度は高いはずだが、一方でSutpenの言説は終始曖昧である。彼の計画、計画挫折の原因、最後の切り札、Bonの出自、に関して読者が得るのは、確かではあるが断片的で十分ではない情報なのだ。

第3次物語世界のSutpenだけでなく、第2次物語世界のcharacter (GeneralとMr. Compson)の言葉や考えをQuentinが伝える形で読者に情報が与えられる場合もある。まずGeneralが事実として知った情報がQuentinを介して読者に伝わる場合を見てみよう。

Sutpen屋敷を出奔し、Bonとともに南北戦争に参加したHenryを、突然Sutpenが訪問する。その時のことを、Quentinは次のように語る。

“He [General] just learned one morning that Sutpen had ridden up to Grandfather’s old regiment’s headquarters and asked and received permission to speak to Henry and did speak to him and then rode away again before midnight.” (222)

“learned”という認識動詞は、目的節の内容を発話者が事実であると前提していることを示している。しかも、助動詞“did”によって、本当に話した(“speak”)とすることが強調されている。実はこの場面は、第8章で詳しく描写される重要な場面なのだが、第7章ではSutpenがHenryに何を言ったのか等の詳細は全く描かれていない。Generalの情報として伝えられるのはSutpenがGeneralの連隊本部でわざわざHenryを呼び出し、話をして帰っていった出来事が実際に起こったということである<sup>9</sup>。

又、Quentinによれば、GeneralはSutpenが自分の事務所を訪れ、切り札を使うかどうかの悩みを打ち明けた時、Sutpenの第2の決断に関して次のように語ったという。

Grandfather said: that morality which would not permit him [Sutpen] to malign or traduce the memory of his first wife, . . . not even to his son by another marriage in order to preserve the status of his life’s attainment and desire, except as a last resort. (218)

この引用箇所からは、最後の手段(“a last resort”)とは具体的に何を指すのか、何故それが最初の妻を中傷することになるのか、何故特にHenryに対して講じられるのか、が皆目見当がつかない。しかしながら、「最後の手段」は「最初の結婚(=最初の妻)を中傷すること」を意味し、「もう一つの結婚による息子(=Henry)」に対して講じられるという情報が、断片的に読者に与えられる。

GeneralとMr. Compsonの両方が同時に提供する情報は次のものである。

“Yes,” Quentin said. “Father said he [Sutpen] probably named him [Bon] himself. Charles Bon. Charles Good. He didn’t tell Grandfather that he did, but Grandfather believed he did, would have. (213)

副詞“probably”はその言説が推測であることを表し、また動詞“believe”は、その目的節は発話者が信じていることに過ぎず、事実ではない可能性もあることを表している。しかし、ここで推測の対象となっているのは、Sutpenが息子にBonという名前を付けたことであって、この推測は、BonがSutpenの息子であるという前提なくしては成り立たない。つまり、引用部分からは、Mr. Compsonも、Generalも、BonがSutpenの息子であることを疑っていないことが判るのである。もし、この前提が

正しければ、JudithとBonの結婚は近親相姦の問題を伴っていることが明らかであり、Sutpenが二人の結婚に反対した理由の説明にもなる。読者も又、この二人の関係については第6章までに暗示されていたから、この前提に異議を唱えるところか、自分の推測が複数のcharacterによって支持されたものと解するだろう。このように、第2次物語世界のcharacterの言葉から読者は、SutpenのHenry訪問、最後の手段、SutpenとBonの関係、について、情報を得ることになる。

最後に、第1次物語世界character、特にQuentin本人が読者に与える情報を検討しよう。この章でQuentinは祖父や父から聞いた話の仲介に徹していて、自分が直接見聞きした情報を読者に提供することはない。しかし、時には、父、祖父の言葉に頼らないで、自分自身の言葉で自分の考えを読者に伝えている。

Henry wrote that he was bringing Bon home with him to stay a day or two before Bon went home. Then Sutpen went to New Orleans. . . . But it didn't work evidently, and the next Christmas came and Henry and Bon came to Sutpen's Hundred again and now Sutpen saw that there was no help for it, that Judith was in love with Bon and whether Bon wanted revenge or was just caught and sunk and doomed too, it was all the same. So it seems that he sent for Henry that Christmas eve just before supper time . . . and told Henry. And he knew what Henry would say and Henry said it and he took the lie from his son and Henry knew by his father taking the lie that what his father had told him was true; . . . . And Henry did it. And he (Sutpen) probably knew what Henry would do next too, that Henry too would go to New Orleans to find out for himself. Then it was '61 and Sutpen knew what they would do now, not only what Henry would do but what he would force Bon to do. . . . (216-17)

ここでQuentinは、それまでに知った情報の断片を因果関係によって紡ぎあわせ、Sutpen物語のあらすじを示している。彼によれば、前章までに度々言及されてきたSutpenのNew Orleans来訪の目的は、最初の妻との話し合いにあった。その内容は明らかにされないが、話し合いは上手く行かず、その結果、クリスマス前夜にSutpenはHenryに「何か」（ここでは内容は明らかではなく、次章で明かされることになる。）を言い、逆上したHenryの出奔を招くことになるのだ。Quentinは、これまでに収集した情報を整理して、意味付け、読者に提示しているのである。

それまでに与えられた情報の意味付けは、Quentinだけではなく、彼の話を聞いているShreveとの共同作業によってもなされる。既に引用した、Sutpenが戦争中にHenryを野営地にまで訪ねて会談したというGeneralの語った事実に対して、その直後に、Shreveが“He played that trump after all.” (222)と言っているのだ。Generalの台詞だけではこのSutpenの行動にどんな意味があったのか判らないが、このShreveの台詞故にSutpenがこの時にHenryに言った言葉が本章で度々言及されてきた最後の切り札であったことが判るのである。

### 3. 読者とQuentinとの情報差

本章における読者とQuentinとの情報差を比較検討しよう。Ex narratorの提供するHenryのBon殺害の情報は、特権的に読者にのみ事実として提示される。Quentinは、その殺害現場に居合わせることはできない。しかし、情報としてはQuentinは既にこのことを事実として知っているので、両者の間で差は生じない。

Ex narratorによる物語言説以外から得られる新情報はShreveのコメントを除けば全てQuentinの

voiceで与えられている。そのため、この章で読者に与えられる情報でQuentinが知らないものはない、と言える。

逆に、Quentinは情報提供者よりも多くを知っているように見える。例えば、情報提供者Sutpenは、彼の話を知っていたGeneralが“his very calmness was indication that he had long since given up any hope of ever understanding it, but trying to explain the circumstance...” (212) と言っているように、自分に起こったことを事実として語ることはできたが、その意味付けができていなかった。また、もう一人の情報提供者GeneralはQuentinが、“Grandfather not knowing what choice he [Sutpen] was talking about even, what second choice he was faced with” (219) と言うように、Sutpenが何の決断をしようとしているのか判っていない。彼はSutpenから聞いた話を、内容は理解しないままにQuentinに語り、そのGeneralの言葉をそのまま変えないでQuentinは読者に伝えている。既に述べたように、QuentinはSutpenやGeneralの情報を整理して語り直しているところから、情報提供者よりも多くを理解しているように見える。しかし、Quentin自身は、核心については読者に情報を与えない。このように、第7章では、認識不足の情報提供者の語りをそのまま脚色せずにQuentinに語らせ、しかもQuentin自身の情報提供は極力避けることによって、読者に与えられる情報はQuentinよりも少なくなり、両者の間に差が生じている。

#### 4. Quentinを相対化する仕組み

これまでの検討によって、第7章ではこれまでになくQuentinと読者との物語構造上の距離が大きくなっていることと、Quentinがnarratorの特権を利用した情報操作で<sup>10</sup> Sutpen家の秘密に関する情報に差ができていくことがわかった。この特徴は第6章までには見られなかったものであり、私が序で述べた③の仕組みを解く鍵を与えているのかもしれない。しかし、よく考えると、これらはQuentinがnarratorであるという設定によって生じたものであり、narrator, listener, という関係だけのために読者がQuentinを相対化してしまうと断じるのは危険である。というのは、相変わらずQuentinは他のcharacterよりも心理的に読者と近い関係にあるし、自分の内面を吐露するnarratorに読者は感情移入するものだからだ。

読者(listener)が、narratorに共感できるかどうかは、そのnarratorの信頼度に大きく左右される。第6章までに、他のどのcharacterよりも読者の共感を得ることができたQuentinがその共感を持続するためには、まず、読者の信頼を得なければならない。確かに、この章でのQuentinは、彼の言葉が嘘でないという意味では信頼できそうである。というのは、彼の語りの決まったパターン(Sutpen told Grandfather that. . .)は、彼は祖父がSutpenから聞いた話をそのまま伝えるていることを示しているからだ<sup>11</sup>。

彼が聞いたとおりに語ろうと努力していることは、次の引用にも明らかである。

“Then he stopped.”  
 “All right,” Shreve said. “Go on.”  
 “I said he stopped,” Quentin said.  
 “I heard you. Stopped what?..”  
 “He stopped talking, telling it,” Quentin said. (205)

ここでQuentinは、先を続けろと促すShreveに“I said he stopped,” と言い、SutpenがGeneralに語らなかったことは語ろうとしない。Sutpenから祖父が聞いた話をそのまま伝えているのであり、

Quentinのnarratorとしての正確を期する態度が良く現れている。

しかし、彼が語ったことの真偽ではなく、別の局面、彼の情報操作(情報の選択)という点から見ると読者のQuentinへの信頼感は薄れていく。読者の関心は、Sutpen家の謎解きにある。そして、同じ関心を抱くQuentinと一緒に行動し、情報と推理を共有してきた。しかし、この章では、Quentinは、自分が知っているのに、読者には知らせていない情報があるということを、Shreveとの対話において露呈してしまうのだ。

“He [Sutpen] chose the name himself, Grandfather believed, just as he named them all – the Charles Goods and the Clytemnestras and Henry and Judith and all of them – that entire fecundity of dragons’ teeth as Father called it. And Father said –”

“Your father,” Shreve said. “He seems to have got an awful lot of delayed information awful quick, after having waited forty-five years. If he knew all this, what was his reason for telling you that the trouble between Henry and Bon was the octoroon woman?”

“He didn’t know it then. Grandfather didn’t tell him all of it either, like Sutpen never told Grandfather quite all of it.”

“Then who did tell him?”

“I did.” Quentin did not move, did not look up while Shreve watched him. “The day after we – after that night when we –”

“Oh,” Shreve said. “After you and the old aunt. I see. Go on. And Father said –” (214)

ここでShreveは、Sutpenは自らBonに名前を付けたのだとするQuentinの父の言葉に対して、Quentinの父はBonがSutpenの息子であることを知らなかったはずではないか、もし知っていたなら、SutpenがJudithとBonの結婚に反対していたのは重婚の問題があったからだなどと、わざわざ持ち出す必要はなかったのではないかと疑問を抱く。読者はShreveと同じ疑問を持つに違いない。というのも、第6章までの間Mr. Compsonは、近親相姦の問題については一言も触れず、重婚問題だけを繰り返し強調してきたからである。Shreveの“Then who did tell him?”という疑問に答えるQuentinの、“I did.”という返事によって、読者の疑問はやっと解消するのだ<sup>12</sup>。

又、本章の最後で、QuentinがWash JonesによるSutpen殺害のエピソードを語る際にも、ShreveはQuentinの話に疑問をぶつける。

“Will you wait?” Shreve said, “– that with the son he went to all that trouble to get lying right there behind him in the cabin, he would have to taunt the grandfather into killing first him and then the child too?”

“– What?” Quentin said. “It wasn’t a son. It was a girl.” (234)

ここでShreveは、Sutpenがその崇拜者のWashに突然殺される場面の描写に戸惑い、どうして、Sutpenが自分の子供の誕生を喜ばないのか、とQuentinに尋ねる。このShreveの疑問はそのまま読者の疑問でもある。この疑問に答える形でQuentinは、“It wasn’t a son. It was a girl.”と補足する。

このように、本章ではQuentinは、自分の持っている全ての情報を読者に進んで与えてくれるわけではない。Shreveの要求に従って渋々与えるのだ。このQuentinの不誠実ぶりを読者に印象づけるのに、決定的な役割を果たすのがShreveなのである。読者は基本的には、narrator Quentinの言葉を信用するしかないが、第3者、観察者Shreveがnarratorの怪しさを指摘することによって、narratorの



信頼が揺らいでくるのだ。本章において、ShreveはQuentinの語りに欠落している情報を指摘する“the proper surrogate for the reader” (Brooks, 323)であり、同時にQuentinを相対化する働きをしている<sup>13</sup>。本章で読者は、ShreveとともにQuentinに対して疑問を持ち、彼を相対化する視点に立つようになるのである<sup>14</sup>。

## 結

以上見てきたように第7章では読者とQuentinとの関係は第1章から第6章までと比べてかなり違っている。これまでのように読者はQuentinとともにcharacterの話聞くのではなく、本章ではQuentinの語りを聞くのである。そのため、(a)両者の心理的距離は小さいままだが、(b)物語構造上の距離はこれまでになく大きい。また、(c)Quentinが認識不足のnarrator達(Sutpen, General)の言葉をそっくり繰り返して読者に伝えるため、両者の間に情報差が生まれている。さらに、(d)Quentinの話に質問を浴びせる観察者Shreveの導入によって、Quentinを相対化する視点を読者に提供している。これら第7章における特徴(a)は、①の仕組み、(b)、(c)は②の仕組み、(d)は③の仕組みに関係がありそうである。第7章の検討が終わった時点で結論を述べるのは早すぎるだろう。その結論を得るには第8章以降の分析を待たなければならない。

(言語文化学科, 英語文化専攻)

key words: 1. William Faulkner. 2. Absalom, Absalom! . 3. Narrative Technique.  
4. Voice. 5. Perspective.

## 註

1. これまで、*Absalom, Absalom!*が読者に与える特異な読書体験について言及してきた研究者は非常に多い。重迫“Ⅰ”註6, 7, 8, 重迫“Ⅳ”註1, 重迫“Ⅵ”註1を参照。
2. William Faulkner, *Absalom, Absalom!*, (New York: Vintage International, 1990) 以下、*Absalom, Absalom!*からの引用はすべてこのテキストにより、頁数は引用に続けて括弧内に示す。なお、適宜次のテキストを参照した。Faulkner, *Absalom, Absalom!*, (New York: The Modern Library, 1951) また、テキストの異同に関しては、Langfordの研究書を参照した。
3. 重迫“Ⅵ”参照。
4. 実はこの箇所は、manuscript, modern library版, corrected版とでかなりの差がある。manuscriptでは、corrected版の222頁でShreveが口を挟む箇所はないが、modern library版にはある。manuscriptには、corrected版の222頁の26行の括弧( )がなく、Quentinの父は“Father”と呼ばれていることから、全てがQuentinのvoiceであることがわかる。modern library版では、この括弧はないが、corrected版のように、Quentinの父はMr. Compsonと呼ばれていて、Ex narratorのvoiceであると考えられる。また、Mr. Compsonの台詞はイタリック体で地の文と区別されている。corrected版では、222頁26行から224頁34行までが括弧に入っていて、Ex narratorのvoiceであることが明示されている。さらに、corrected版では、manuscript, modern library版と違って、括弧内のSutpenやJudithの台詞はダブルの引用符で括られて(manuscript, modern library版はシングルの引用符)、生のキャラクターのvoiceが記されているかの印象を与える(Langford, 278-84)。これらのことから、この括弧内の物語言説が、誰のvoiceであるかの解釈が、版によって異なると言えるが、私は、Faulknerの意図を忠実に再現した最良のテキストとしてcorrected版の解釈を支持したい。

5. 又、彼がフランス語を習っておく必要があったのは、“in order to oversee the plantation” (200) であり、“to repudiate the wife” (200) であると彼が語ったことがGeneralを介して伝えられ、Sutpenがフランス語を何故習得する必要があったのかについての疑問も解消するようになっている。
6. 199頁にも該当箇所がある。
7. BonがSutpenの息子であるという考えは本章213頁で読者に示される。
8. 211頁、212頁にも同じようにSutpenと最初の妻との話題がある。
9. Generalは、農園主のもとで起こった奴隷による襲撃事件の話をSutpenから聞いた後で、以前からSutpenがコーヒーに砂糖を入れないのを知っていたので、Sutpenの砂糖嫌いは襲撃事件が原因であると考える (201)。この情報は、襲撃事件が事実であるという証拠として働く。
10. narratorは、故意に、あるいは、意図せずに、自分が語る物語の情報を操作することができる。Quentinは、第2次物語を支配するnarratorであるとはいえ、Ex narratorに支配される第1次物語世界characterである。しかしながら、本章では時としてEx narratorより支配的に見えることがある。例えば、Quentinの語りの合間にShreveが質問するとき、Shreveのセリフとその状況を説明するEx narratorのvoiceは括弧に入れられる (177, 179, 180, 188, 222)。このことは次章ではもっと重要な意味を持つことになるのでここで指摘しておく。
11. David Paul Ragan (104) も、“His [Quentin’s] narration of the events of Sutpen’s life. . . does not hold any particular emotional commitment for him, and he tells the story for the most part straightforwardly, limiting his own interpretation to a minimum. . .” (104) と指摘している。
12. このShreveが口を挟む行為について、Ruppersburgも、“Such interruptions force Quentin to explain the story more fully.” (123) と、Shreveの役割を指摘している。
13. Raganは、第7章でのShreveの働きについて、“Shreve’s part in chapter 7 is less important than in the other units of the novel’s second movement. Essentially his purpose is to provide a listener for Quentin.” (105) と言う。本章におけるShreveの役割が、彼の7章での語りが6章から9章までの間で最も少ない故に、重要でないと思わしているが、この意見は、narratorの機能の方が、listenerの機能よりも重要だという暗黙の了解の上になり立っている。私の考えでは、むしろ、本章のShreveは、Quentinのlistenerであるが故に、このnarratorを相対化するという大きな役割を果たしている。
14. しかし、Shreveと読者との心理的距離は、Quentinと読者とのものよりも大きく、読者がShreveの方に感情移入することはないだろう。

### 参考文献

- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1963, 1990.
- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. New York: Vintage International, 1990.
- \_\_\_\_\_. *Absalom, Absalom!*. New York: The Modern Library, 1951.
- Genette, Gerard. “Discourse de recit, essai de method.” *Figures III*. 1972, (花輪光・和泉涼一訳【物語のディスクール：方法論の試み】水声社, 1983).
- \_\_\_\_\_. *Nouveau discours de recit*, 1983, (和泉涼一・神郡悦子訳【物語の詩学：続・物語のディスクール】書肆風の薔薇, 1985).
- Langford, Gerald. *Faulkner’s Revision of Absalom, Absalom!: A Collation of the Manuscript and the Published Book*. Austin: U of Texas P, 1971.

Ragan, David Paul. *William Faulkner's Absalom, Absalom!: A Critical Study*, Ann Arbor: U.M.I Research P, 1987.

Ruppersburg, Hugh M. *Voice and Eye in Faulkner's Fiction*, Athens: The U of Georgia P, 1983.

重迫 和美 “Absalom, Absalom! におけるFaulknerの語りの技法Ⅰ”『比治山大学現代文化学部紀要第2号』1995.

\_\_\_\_\_. “Absalom, Absalom! におけるFaulknerの語りの技法Ⅱ”『比治山大学現代文化学部紀要第3号』1996.

\_\_\_\_\_. “Absalom, Absalom! におけるFaulknerの語りの技法Ⅲ”『比治山大学現代文化学部紀要第4号』1997.

\_\_\_\_\_. “Absalom, Absalom! におけるFaulknerの語りの技法Ⅳ”『比治山大学現代文化学部紀要第5号』1998.

\_\_\_\_\_. “Absalom, Absalom! におけるFaulknerの語りの技法Ⅴ”『比治山大学現代文化学部紀要第6号』1999.

\_\_\_\_\_. “Absalom, Absalom! におけるFaulknerの語りの技法Ⅵ”『比治山大学現代文化学部紀要第7号』2000.